

# 「新たな日常」を模索して一中学1年・朗読劇一

附属天王寺中学校 篠原 孝雄

## 1 はじめに

中学1年生の多くは、新型コロナウイルス感染拡大のため、小学校の卒業式を満足に行えなかったことだろう。本校の入学式も4月、5月と開催を見送り、通常の2ヶ月遅れの6月1日ようやく入学式を開催することができた。入学式は何とか開催できたものの、クラスメイトとの団結を図るための合宿訓練や本校の3大行事である体育大会や学芸会は中止となった。1年生は、決して仲は悪くないが、人間関係はまだまだ表面的で、お互い浅い関わりしかできていないように感じていた。その要因としては、合宿訓練や体育大会などの行事を通じて、1つの目的や目標に向かって、学級集団で話し合ったり、協力し合ったりしながら、何かを成し遂げるといった経験をしていないということが考えられた。とりわけ学芸会は、学級生徒全員の総合力が問われ、自主性や協調性・企画力・運営力の育成が期待できる行事である。そのような力を生徒が付けることは、生徒同士の絆を深めるだけでなく、今後の社会生活においても不可欠だろう。そして、学年教員で話し合った末、先述した能力を育成でき、感染症対策を十分に講じることができる学芸会に代わる行事として、朗読劇が最適であるという結論に至った。

## 2 朗読劇当日までの流れ

朗読劇とは、公演中、朗読者は、最初から最後まで定位置に座っており、台詞を発するときだけ起立し、観客側を向き、台本を持ちながら音読するスタイルで上演するものである。朗読者は、主に声や顔の表情、手振りによる演出で観客にイメージを伝える。体育大会に引き続き、学芸会も中止となり、生徒たちの間には少し落胆ムードが広がっていた。しかし、1年生独自で朗読劇を開催することが担任から告げられると、生徒たちの表情から笑みがこぼれた。1年生は学芸会を経験したことがないので、学芸会のイメージを掴むため、昨年の学芸会の録画映像の上映会を行った。上映会後には、各学級でキャスト以外にも、いろいろな役割が存在することを共有した。その上で、シナリオを募り、シナリオの作者にはプレゼンを行ってもらった。そして、学級での話し合いや多数決を経て、上演作品が1つに絞られた。クラスメイト全員が協力し合いながら、朗読劇を作り上げていくことは、そんなに容易くはないので、最初は上手いかわからないのではないかと不安があったが、実際は杞憂に終わった。生徒たちは躊躇することなく、朗読劇の練習や準備に生き生きと取り組んだ。学級生徒全員の力を総結集させることができる機会に恵まれたことで、生徒たちはこれまで感染症拡大防止のために抑制を強いられた学校生活の中で鬱積した力を放出しているかのようにも見えた。分散登校やマスクで顔を覆いながらの学校生活は、生徒たち同士の身体的なディスタンスだけでなく、心のディスタンスも作り出していたと思うが、朗読劇の取り組みは、その心のディスタンスを縮めるのに効果的取り組みだと感じた。いつもは自主性を重んじ、できるだけ静観することに努めている担任の先生も、此処ぞという時には、鶴の一声を発し、生徒たちを鼓舞したり、だらけた雰囲気を引き締めた。生徒たちも、担任の先生のアドバイスを忠実に守りながら、発表当日まで手を抜かずに朗読劇をつくり上げていった。いつもなら劇中の舞台背景は書き割りを作成して、表現するが、朗読劇では感染症対策として、書き割りの作成は行わなかった。パワーポイントをプロジェクターで壁面に写し出すことで代用した。書き割りの方が、味わい深いですが、新しい生活様式に合わせた実践として提案したい。

## 3 講じた感染症対策

大阪府教育庁が発出したガイドラインに鑑みて、講じた感染症対策を以下に示す。(※ガイドライン引用部分は太字で記載)

### 「接触」「密集」「近距離での活動」「向かい合っでの発声」等を可能な限り避ける

- 朗読者間、朗読者と係生徒間、係生徒間でのソーシャルディスタンス(1~2m程度)を確保する。
- 生徒同士は身体接触をしない。
- 朗読者は、上演中のすべての時間において、定位置から動かない。
- 朗読者と観客との距離を5メートルとり、朗読者同士は向き合って発声しない。
- 上演中の衣装直し(更衣)は行わない。
- 入りと出でのクラスの交錯を防止するために、上演開始前の準備と終了後の片付けの各5分間は、上演クラスだけが使用する。
- 練習や準備は、必ず学年教師の監督のもと、密にならないようにする。朝練や放課後練習は行わない。

### 道具の共用を可能な限り避け、やむを得ず共用する場合は、使用前後の手洗いを徹底する

- 書き割り(大道具)は作成しない。
- 小道具を作成する場合は、一人の手で完成させる。また、作成の際には、道具の共用や貸し借りはせず、自分の道具を用いる。
- 舞台装置や放送設備に触れることのできる生徒は各1名ずつ、音響機器とピンスポに触れることのできる生徒は各2名ずつに絞り、不特定多数でそれらの機器に触れることを避ける。

### 広く天井の高い場所でも密閉空間とならないように、2方向以上の窓等を同時に開けるなど、換気を励行する

- 休憩中や公演が終わる毎に、体育館の舞台東側通路扉、プール側の窓、出入り口の換気を行う。

### 催し物の会場内での身体的距離を1メートル程度確保できることなどを目安として、人数を制限する

- 保護者の参加はなしとする。観客として参加できるのは、教員と学年生徒のみとし、席と席の間隔も1メートル以上を確保する。

## 4 朗読劇当日

各学級の上演作品は次の通りとなった。

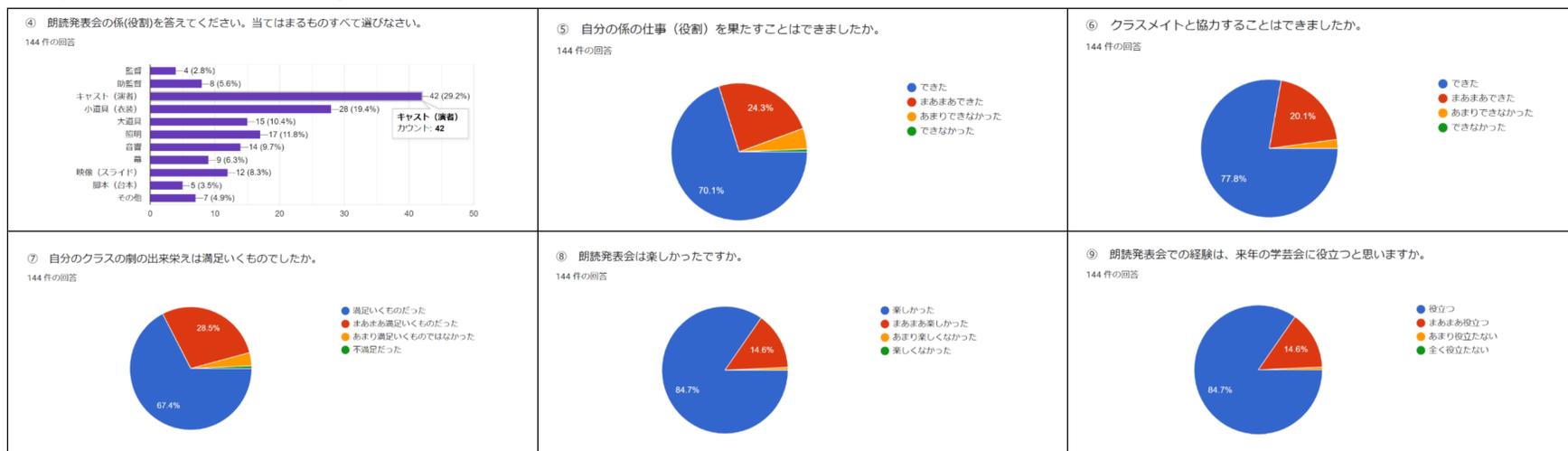
A組「呪われた少女」  
B組「少年の日の思い出 続編」  
C組「#人狼ゲームなう」  
D組「浜村渚の計算ノート～ぬり絵をやめさせる～」



公演は、ABCDの順番で行った。朝練や放課後練が

できず、学芸会に比べ練習する時間が少なかったため、劇の完成度について若干不安はあったが、どのクラスも緊張やプレッシャーに負けず、練習の成果を如何なく発揮した。大きく堂々とした声で、表情や手振り身振りを加えながら、観客に分かりやすく、劇の内容を伝えた。朗読者と係が息の合った連携プレーで、効果音やプロジェクターを駆使しながらのストーリー展開も非常に効果的であった。学年教師の予想を上回る出来栄であった。普段の授業では見ることのできない、生徒たちの一面も垣間見えた。

## 5 事後アンケート結果



## 6 ふり返り

どのアンケート項目においても、90%以上の生徒が、前向きな回答をしていることから、今回の劇の目的である「学級全員が一丸となること、自主性や協調性・企画力・運営力の育成」を概ね達成できたと考えている。また、「練習時間やメインアリーナを使う時間が短い」という生徒の感想から、学芸会のような行事では、いかに計画的に準備を進めていくことが大切かを、生徒たちが身をもって学ぶ機会となったのではないかと考える。一方、少数ではあるが、「協力できなかった」や「楽しくなかった」、「不満足」などの消極的な回答があったことについて、教師は真摯に受け止めていきたい。朗読劇の数日後に行ったクラス対抗四方綱引き大会では、各学級クラスメイトに声援を送る姿が見られ、団結力がより一層強くなったように感じた。1年生は、来年度、様々な行事において、附属天王寺中学校の先輩としてのパフォーマンスが問われるだけに、今回の朗読劇はその素養を培うための良い経験となったと考える。早くも来年度の学芸会が楽しみである。